

心にみているわたくしも、まったく同意する。

この問題に迫る方法がめざましく他の追随をゆるさない。インドと中国の労働者個人 1,700 人に直接聞く。質問をきめた面接である。伝統的な業種のみならず電子、機械産業にもわたる。インドでは製糖、電子、製陶、計 40 工場、中国では天津と武漢の機械工場 10 である。

しかも調査の一部は 4 年という期間をおいたパネル調査である。それによって意識の変化を見ようとする。見事な調査といわねばなるまい。パネル調査でなくとも、たとえば企業改革のすすんだ企業群と改革の遅れた企業群の労働者を対比し、仕事意識の変容を確かめようとする。

国際比較調査につきものの困難を、この本はよくのりこえた。わたくしの経験でも職場調査ではことばの通訳、翻訳に苦慮した。ことばの流暢さだけではまったく役に立たない。仕事の内容を知らない、意思疎通ができない。それならば、ことばをきめた質問方式がむしろ有効であろう。それでも翻訳は容易ではない。この本の著者はインド、中国のことばをよく解する。技術的にも周到で、適切な統計処理の方法をもちいるのみならず、非標本誤差という面倒な問題にも深く心を配っている。後者はしばしば見逃されがちであり、ここから高い敬意をはらいたい。

あえて困難な方法をとった理由は、この本の理論的な想定にもとづく。そこにこの本の見事なあざやかな特色と、のちにみるささやかな問題点が胚胎する。この本は、経済の開発がたんに「規律ある労働力」の形成、つまり「指示された業務を最小限規律正しくこなす」にとどまらないことを強調する。技術の改良や高い生産性は、言われたことを行うだけでなく高いモチベーションを要する。それには生産現場や企業組織への「心理的な帰属感」、職場生活への「肯定感」、さらに価値観への「共鳴」がないとむつかしい、と考える。それが高い生産性を生み出す、という仮説である。

その仮説を具体的に検証するために、3つの指標を用意する。その指標とは「職務満足」「コミットメント」そして仕事を「便宜的手段」とは見ずに仕事それ自体を重視する態度である。これらは先進国の労働者意識調査でよくもちいられる指標であり、それを徹底して非先進国の労働者に適用したところに、この本のめざましい特色があろう。

ここからまた、この本のもうひとつの見事な特徴、

清川雪彦

『アジアにおける近代的工業労働力の形成』

——経済発展と文化ならびに職務意識——

岩波書店 2003.2 xiv+485 ページ

1. 問題、方法、みいだされたこと

これはめったに出現しない見事な作品である。そのすばらしさは、この本がとりあげた問題、それを解く方法、みいだされたことをみていけば、おのずと了解されよう。ただし、そのすばらしさに触発され、紹介よりもわたくしのコメントを多く書きたい。

この本はまことに重要な問題に正面きってとりくむ。すなわち産業化の真の要件、職場における人材の質を解明しようとする。それは、いままでのおもな議論への明白な反論でもある。これまで開発が進まなかったのは資金、経営者、技術者の不足にあるとされてきたが、外資が多く導入されこれらの不足は緩和された。にもかかわらず生産性ははるかに低いとすれば、それは職場で働く労働者の質こそが問題であろう。この問題に正面からとりくんだ。わたくしの観察した範囲内でも、似た機械や設備でときに数倍にもものぼる生産性差がみとめられた。品質を考慮すれば、その差はさらに大きく開く。そのすくなからずは労働者の質に起因する、とおもわれた。

人材の質といっても、たんに低い規律、高い欠勤率の克服でよし、とするのではない。さらに一段と高く、自分の判断で状況に対応しようとする意欲の高い労働者の形成を重視する。それなくしては長期の生産性向上はない、とみる。現代先進国の職場中

文献の博搜がでてくる。この本に直接かかわる開発経済学の関連文献はもちろん、一般の経済学またX効率を主張する文献もふくめ、さらに経営学、産業心理学、ひいてはウエーバーなど古典にもおよぶ。しかも、それぞれに丹念克明に先行研究をあとづける。

周到な方法によって見だされたことは豊富で、とうていここで書つくせない。せめて幾分なりとも記せば、第一に、これまでのおもな見解を実証的に検討し、たしかな根拠をあげて否定する。たとえば、労働者の低い規律はおもに農村とのつながりにある、との主張にたいし(同様な主張はかつて大河内説として日本についても主張された)、農村とつながりのある労働者グループとないグループにわけ、アンケート調査結果からそれを否定する。また女は男よりも仕事意識が低いとする見解も、宗教優先であるがゆえに仕事意識が低いという見解も、綿密なデータにもとづき否定する。

職務意識の変化についても立ち入って検証する。企業改革のすすんだ企業の労働者グループとおくれた企業のグループを対比し、変化が起きていることを確かめる。あるいは解雇など不利な状況でも労働意欲が案外に減退していないことを明らかにする。

一見小さな、じつはすばらしい発見も数多い。学校教育を案外にひとびとは重視せず、それが開発に枢要ではないことを明らかにした。これは実務経験こそ重要だという含意をもたらす。途上国では教育の普及こそという見解がつよいゆえに、注目される。また、離職者のその後も聞いている。中国の天津調査である。これはどの国でも実施のむづかしい貴重な調査である。あるいは中国ではいまや短期の成果主義が蔓延していると言説が広まっているなか、個人の賃金データを回帰式で計算し、1歳あたり3%ほど賃金があがることを明らかにした。この数値はけっして低くない。貴重な発見は枚挙にいとまない。

2. やや狭い技能観

どのような名品にも不満はこのころ。わたくしの小さな不満はほとんど一点に収斂する。それは技能の役割である。かの意欲ある労働者はどのようにして生産性を高めるのか、その過程の説明がみあたらない。意欲ある労働者でないと長期に生産性の向上が期待できない、とくりかえしこの本は強調した。意欲ある労働者とは指示されたことを最小限こなすだ

けではない。自分で状況を判断して対処する。だが、どのような状況を自主的に判断し、どのように行動するのか、そうすると、どのような過程で効率があがるのか、その具体的な説明、あるいは具体例は、読み落としたのかもしれないが、わたくしには見つけることができなかった。

質問のきまった調査では、その点の解明はむづかしいかもしれない。意識にとどまらず職場の行動をも知ろうとしたら、職場を尋ねよく知る人にじっくりと聞くことであろう。これだけ事例に即していぬいに調べているのだから、その具体例を記してほしかった。おそらく聞きとりなどでは数量分析になじまず、客観的な検証に耐えない、との考えによるのであろう。だが、せめて補助的にでも活用していたら、どのようにしたら生産性向上をはかることができるか、その貴重な情報が読み手に伝わるかもしれない。

それをおこなわない最大の理由は著者の技能観にあらう。技術が標準化した今日、技能の役割は小さくなった、と著者はみている。クラフト的なものを技能とみているかにもおられる。それでは今日もっとも有力な技能を見逃すことになりはしないか。ひとつの仮説によれば(小池和男, 中馬宏之, 太田聡一「もの造りの技能」2001年), 言われたことのみこなす「ふだんの作業」とはちがいが、かならずしも予測されない「変化」と「問題」をこなす技能である。おもわぬ品質不具合や、設備の故障への対処、さらには設計へあらかじめ予測される問題点を指摘することである。こうしたおもわぬ問題への対処なしに、いまの日本の高賃金をこえた競争力はとうてい考えられない。この本のいう技能は、初期の開発に必要なレベルにふさわしく、それにおうじた労働意欲があればよいのであろう。だが、さらに一段と高い仕事は、高度な技能なしには、いかに労働意欲が高くてもこなせないのではなからうか。

副次的な点を記す。概してこの本の日本理解につきわたくしは同感するところが多いが、なおわずかに違和感を禁じえない。それは集団の強調である。日本理解はインドや中国を判断する重要な基準でもある。平等、集団、そして競争をこの本は日本の特徴として重視する。平等、競争の強調に異論はないが、はたして集団の強調があたるであろうか。たしかに主流の意見は日本の特徴として集団を強調する。だが、虚心に職場の実際をみれば、これほど生産職場にもサラリーの個人別の査定が広がっている国が

他にあらうか。十分なデータがなくわたくしの観察した狭い範囲のかぎりでは、先進国ではホワイトカラーには広がっていても、この本が焦点をあてている生産労働者層にはあまり広がっていない。非先進国ではそれよりもすこしは普及しても、はたして日本ほどであらうか。しかも日本の査定は集団つまり職場ごとの業績ではない。あくまで職場内で個人ごとに差がつく。それも年々積み重なり中長期の働き

ぶりを反映する。個人間競争のはげしさを日本の通念が見逃していても、これほどすばらしいこの本がその認識を踏襲するのはもったいない。

とはいえ、わたくしのコメントは、このすばらしい業績をいささかも損なうものではない。あとわずかに実際の慣行の観察があれば、と庶幾するものである。この名品の誕生を祝い、筆をおく。

[小池和男]